

連 携

三宅島には、保育園・小学校・中学校・高等学校は1園1校ずつです。園児から高校生までの子供たちの人数は、合計で約200名となります。島の子供たちのことを、「島の宝」として島民みんなで大切に育てている愛に溢れた温もりのある島です。私たち、教育機関においては、昭和50年代から脈々と継続している保小中高一貫教育として、「島の宝」を真ん中にした連携を密にしてきました。当然、時代によってその連携の方法や内容には、変化があります。過去の資料を紐解くと、発足当初は、生活習慣の乱れを共通の課題として、より健康的な生活習慣を身に付けさせるための連携を図ってきたことが明示されていました。その後も、郷土理解学習、学力向上、グローバル人材の育成など、時代と共に追究するテーマの変遷が見られます。今年度も、三宅村教育委員会と共にさらなる連携を深めていきたいと考えています。

また、保小中高の合同行事も継続して行われています。例えば、隔年で行われている作品展、音楽会です。島の宝が一堂に集まり、体育館はコンサートホールとなります。保護者、島の人たちの視線の先には、島の宝の輝きがあります。

小中合同行事でいえば、5月に開催される運動会があります。すでにそれぞれで、運動会へ向けての練習や職員間の連携が始まっています。小学生は、中学生の姿を目の前で見ることで、憧れをもちます。中学生も小学生に示す姿として、より高みを目指して努力します。個の努力の終結が集団の輝きを放つのも、土台として学校間の連携があるからこそでしょう。

さて、遡ること30数年前になりますでしょうか。私がまだ軽快に重力に逆らうことができたころの話です。高校・大学と多くの時間をバスケットボールのプレイヤーとして過ごしていました。その当時は、アメリカのプロバスケットボール（NBA）の試合をテレビで観るのをとても楽しみにしていました。

しかし、その当時は、現在のように、いつでもどこでも観られる時代ではありません。金曜日の深夜から始まるNBAの録画放送をブラウン管の中でしか見ることができませんでした。

私はテレビの中でひととき異彩を放つチームと出会いました。それが、シカゴ・ブルズでした。マイケル・ジョーダンというスター選手が輝いているのはもちろんですが、私が魅了されたのは、チーム全体の連動感、そして一人ひとりの役割が見事に絡み合う「連携の美しさ」でした。

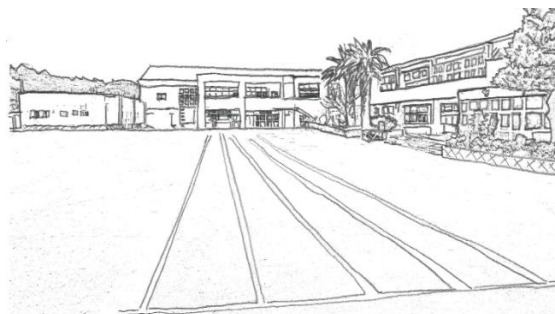
その裏には、監督であるフィル・ジャクソンの存在がありました。フィルは、どんなに優れた選手であっても、「個の力」だけに頼ることなく、全員が関わる戦術＝トライアングル・オフENSEを導入し、徹底しました。特に象徴的なのは、エースのジョーダンに対して、「仲間をもっと信じてパスを出そう」と繰り返し語りかけ、個人の得点よりもチーム全体の連携を優先させた点です。

一見、遠回りにも見えるその選択が、結果としてシカゴ・ブルズを1990年代の黄金時代へと導いたのです。フィルはこう言っています。

“The strength of the team is each individual member. The strength of each member is the team.”（チームの強さは個々に支えられ、個々の強さはチームに支えられている。）

この言葉に、教育の本質も重ねて見ることができると思います。

三宅島における保小中高一貫教育は、まさにこの思想を体現しています。それぞれの園・校種が単独で頑張るのではなく、「島の宝」である子供たちを真ん中にして、連携しながら育てていく姿勢。時代と共に連携の形は変わりながらも、「皆で育てる」という根っこの部分は変わっていません。



三宅村教育長は、「子供たちが『三宅島で育ってよかった』と言えるような学校教育を展開していきたい」と、仰っていました。校長室の窓から、きれいに引かれた50mのレーンを競走する子供たちを眺めつつ思いを巡らせています。

これからも、園・学校・地域が手を取り合い、島の宝たちを真ん中にして描かれる「連景」。その一枚一枚が、やがて島の未来を彩る大きな風景となり、そこに心地よく流れるのは「協奏」。